

照屋行雄著

## 『企業会計の基礎』

(東京経済情報出版・2006年・3,400円＋税)

静岡産業大学 松 井 富佐男

企業会計は、固有の記録・計算システムを通じて、現代企業の経営活動を合理的に測定し、その財務内容を各種の利害関係者に開示する機能を果たしている。企業の利害関係者は、開示された会計情報を分析・利用することによって、企業の状況に関する適切な判断と合理的な意思決定を行なうことができるのである。

今日では、ビジネス社会を構成するあらゆる主体において、その経済的意思決定を合理的に行なうために、企業会計が提供する財務情報が利用されなければならない。このような現代社会の高度な情報要求を動機づけとして、企業会計の理論的・技術的構造の妥当性と制度的・実践的手続の公正性がますます強く求められている。

さて、現代企業会計は、一方で会計実践の多様化・複雑化が進展するとともに、他方で会計理論の精緻化と会計制度の高度化が追求された。理論的には資産の時価評価や減損損失の認識などの問題が究明され、また、制度的には金融商品会計基準や企業結合会計基準などが整備された。

本書は、このように高度に専門化した現代企業会計の理論的・制度的基礎を体系的に整理し、同時に、会計処理の技術

的構造を平易に説明した企業会計の基本書である。類書に見られない斬新な視点と構成によりまとめられ、大学生の会計基礎教育やビジネス社会人の会計学学習に好適な会計学書となっている。

本書は、全体で4部12章から構成されている。その内容は、次のとおりである。

### 第1部 企業会計の構造

- 第1章 企業会計の概念
- 第2章 会計原則の内容
- 第3章 会計要素の測定

### 第2部 複式簿記の原理

- 第4章 簿記の基礎概念
- 第5章 帳簿記入の手続
- 第6章 決算と財務諸表

### 第3部 財務情報の開示

- 第7章 企業の開示制度
- 第8章 財務諸表の作成
- 第9章 連結財務諸表の開示

### 第4部 企業会計の展開

- 第10章 外貨換算会計の基準
- 第11章 株式会社の会計
- 第12章 財務諸表の分析

\* \* \*

第1部「企業会計の構造」では、企業会計の基礎概念や理論的構造が体系的に明らかにされ、第2部「複式簿記の

原理」では、複式簿記の基本要素や帳簿記入のルールが平易に説明されている。また、第3部「財務情報の開示」では、企業の財務開示制度や財務諸表の作成基準が体系的に整理され、第4部「企業会計の展開」では、外貨換算会計、株式会社会計および財務諸表分析の基礎知識と基本技法が明らかにされている。

本書の第1の特徴は、会計教育に対する著者独自の考え方を具体化して、従来にはない新しい会計教育領域の形成を試みている点にある。著者は、高度に専門化した現代会計学を体系的・効率的に学習するには、従来の技術的な簿記原理の修得を優先するアプローチや、会計学の全領域を総花的に概観する方式では不十分であると指摘する。その上で、企業会計の基礎教育にあっても、「会計学のパラダイムとフロンティアが提示されなければならない」と明確に主張するのである。

第2の特徴は、現代企業会計の理論的構造と技術的構造を融合し、また、会計測定領域と情報開示領域を結合して体系化している点にある。本書では、高度に専門化した現代会計学の理論、制度および技術に係る基礎的領域について体系的にまとめられている。特に、複式簿記の原理を会計理論の次に位置づけて組み込んだことと、2006年5月1日より施行された新会社法に基づく株式会社会計制度について最新の内容を詳述している点は、斬新な発想とともに精緻な努力の成果として高く評価できる。

そして、本書の第3の特徴は、各章の記述にあたって文章による説明に終始せず、必要に応じて図表や計算例を用いて内容の理解を支援する工夫が導入されている点が指摘できる。本書の内容は、決

して易しいレベルのものばかりではないが、大学やビジネス社会で現代会計学を学ぶに当たって修得しなければならない基礎となっている。体系的な目次構成や詳細な用語索引も含めて、会計基礎教育の重要性を認識する著者ならではの創意と工夫に満ちた編集となっている。

以上の他にも、例えば第2章の企業会計原則の構成や第12章の財務諸表分析の技法などで、著者独自の優れた記述や説明が多く認められるが、紙幅の関係で割愛せざるを得ない。

\* \* \*

最後に、評者が気づいたところを2点ほど明らかにしておきたいと思う。第1点は、企業会計の基本要素である資産、負債および資本の概念と計算的關係について、複式簿記の原理を第2部に配置したことの学習上および教育上の効率性が気になる点である。この点は、本書の利用を重ねることによって経験的に評価されることになる。第2点は、第5章および第6章の帳簿記入や決算手続の説明が丁寧にもかかわらず、簿記技術修得のための例題や演習問題が必ずしも十分でないことは、利用者側からすればもの足りないように思う。これについては、著者が別に詳細な簿記書を近く公刊することになっているので、それに譲ることになる。なお、これらの点は、今後の本書改訂の機会に検討を加えられることを希望したい。

本書は、企業会計の基礎を体系的に論述した良質の基本書として多くの読者に歓迎され、定評を博することになると確信する。広く本書の活用を勧めたい。